

描画を介した「気になる子」の支援

—子どもの発達を手がかりに—

見 立 知 穂*, 高 橋 眞 琴**

(キーワード：描画，発達の視点，アセスメント)

I. 問題と目的

学級には、友達との関係、家庭的な背景、学業での悩み、行動上の問題、発達障がいの可能性など、様々な課題を抱えている子どもたちが在籍していると考えられる。このような子どもたちは、担当する教員にとって、「気になる子」として捉えられていると考えられる。

「気になる子」の概念は、実践者や研究者によって異なる。例えば、菅原(2016)は、「発達の面だけではなく、様々な生活の場面で困難を示す子どもたちや保育士が明らかな障害はないが気になると考えている子どもたち」を「気になる子」と表現している。堀(2015)は、「ことばの発達や対人関係において気になるところがある」子どもについて、グループ活動を行っている。

このような気になる子をクラスに在籍している際に、教員が検討するのが、「相談先」である。まず、「気になる子」について、学年集団や学年の会議で話題にした後に、例えば、家庭的な背景なら、生活指導の担当やスクールソーシャルワーカー、心理的な問題なら臨床心理士やスクールカウンセラー、発達障がいに関する内容なら、特別支援学級の担当や特別支援教育コーディネーターといった形で、連携先が検討されていく場合が多いのではないだろうか。

文部科学省(2012)の「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」においては、発達障がいの可能性のある特別な教育的支援が必要な児童生徒が全体の6.5%存在している可能性が指摘されている。このような状況の中、通常学級の担任は、特別な支援を要する子どもに対するアセスメントを検討する場合も多い。

例えば、徳島県立総合教育センターは、「学びにくさやつまずきのある子どもを学校場面での観察によるチェックを通し、早期に発見し、対応を考えることを目的」とする「チェックシート(改訂徳島版)利用マニュアル」を開発している。

このような学級における行動観察の後に、さらに、児童・生徒の学習上や行動上の困難の原因を捉え、今後の方策を検討するために、児童・生徒本人や保護者を変え、アセスメントについて検討される場合がある。

表1は、2007年から特別支援教育が本格実施となった後の「特殊教育学研究」におけるアセスメント方法(抜粋)であるが、用いられているアセスメントの方法は、WISC III、田中ビネー検査、S-M社会能力検査が多数を占めていることが見てとれる。現在においても、WISC IIIの後継であるWISC IVや田中ビネー検査、S-M社会能力検査、K-ABC、K-ABC IIなどが、発達障がいのある子どものアセスメントの際に用いられる場合がある。一方、特別な教育的ニーズの概念を先行して取り入れている英国においては、児童・生徒の現在の状況を捉えるために、児童・生徒の描いた絵画や作品をスクラップしていき、クラス担任とティーチングアシスタント、スクールソーシャルワーカー、学校管理職、インクルージョンリーダーが検討を加えている場合が多い(高橋, 2016; 原田他, 2016)。

例えば、特別な教育的ニーズを要する児童・生徒の描画に関する研究においては、大城・神園(2008, p.82)が、「自閉症児が描く絵は彼らの内面世界を投影する表現の一種」と述べている。天岩(2016)は、知的な遅れのいる児童が、パソコン描画ソフトを用いて自己のイメージを絵で表現する様子とその過程について観察している。野田・吉岡(2015)は、自閉症の生徒との、プレイセラピーにおいて、描画を媒介として、生徒とのイメージの共有を試みている。

また、描画のカンファレンスや実態把握への活用を示唆した研究もある。石山・田中・池田(2014, p.80)は、「空間認知能力の主座は、脳の頭頂葉である。頭頂葉の機能は、自己の身体とそれを取り巻く三次元的世界の構造と位置と配置を知覚し、記憶を蓄え、それに基づいて眼球と手足の運動を調節することである。これらの要素は、どれも描画の実現に不可欠である。」と述べ、描画を

*鳴門教育大学大学院特別支援教育専攻

**鳴門教育大学基礎・臨床系教育部

表 1 特別支援教育実施後の「特殊教育学研究」におけるアセスメント方法（抜粋）

発行年月	巻・号、ページ	著 者	論 文 名	記載されているアセスメント方法
2007. 5	45(1), 35－48	大久保 賢 一 福 永 顕 彦 井 上 雅 彦	通常学級に在籍する発達障害児の他害的行動に対する行動支援：対象児に対する個別的支援と校内支援体制の構築に関する検討	WISC III
2007. 7	45(2), 67－76	坂 尻 千 恵 前 川 久 男	注意欠陥多動性障害児および広汎性発達障害児を対象とした Stop-signal 課題における反応抑制の検討	田中ビネー検査 ・ WISC III
2007. 9	45(3), 149－159	岡 村 章 司 藤 田 継 道 井 澤 信 三	自閉症者が示す激しい攻撃行動に対する低減方略の検討：兆候行動の分析に基づく予防的支援	S-M 社会能力検査 ・ 強度行動障害判定基準表
2007. 11	45(4), 217－227	三 井 菜 摘 熊 谷 恵 子	自閉症児に対するエコロジカルなアセスメントを用いたコミュニケーション指導	田中ビネー式知能検査Ⅳ・ 東京 IEP 研究会活動 4 領域
2008. 1	45(5), 243－254	廣 澤 満 之 田 中 真 理	非慣用的言語行動を多用する自閉性障害児に対するかかわり手の発語の分析：かかわり手による非慣用的言語行動の理解変容過程との関係	田中ビネー検査 ・ WISC III（測定不能）、 CARS
2008. 1	45(5), 265－273	網 谷 優 子 武 蔵 博 文	発達障害児の集団における社会的コミュニケーション環境についての検討：「発表者」「聞き手」の役割学習の効果	田中ビネー検査 S-M 社会能力検査
2008. 3	45(6), 423－436	後 藤 隆 章 雲 井 未 欽 小 池 敏 英 太 田 昌 孝	LD 児における日本語かな文字読みの特異的読字障害（英文）	WISC III
2008. 3	45(6), 473－488	室 谷 直 子 前 川 久 男	PASS 読み促進プログラム（PREP）を用いた読み困難児の読み支援（英文）	WISC III
2008. 3	45(6), 489－500	高 橋 甲 介 野 呂 文 行	路上で危険な行動を示す自閉症男児への安全な歩行スキルの指導（英文）	WISC III
2008. 3	45(6), 513－526	廣 澤 満 之 田 中 真 理	広汎性発達障害児における非慣用的言語行動の発達過程：非慣用的言語行動の機能に着目して（英文）	WISC III・ 田中ビネー検査
2008. 5	46(1), 1－9	渋谷 郁 子	幼児における協調運動の遂行度と保育者からみた行動的問題との関連	M-ABC
2008. 5	46(1), 49－59	佐々木 かすみ 竹 内 康 二 野 呂 文 行	自閉性障害児におけるピアノ演奏指導プログラムの検討	WISC III
2008. 7	46(2), 69－79	樋 口 和 彦	読み障害児のひらがな単語の読みにおける文脈の活用について	WISC-R
2008. 9	46(3), 193－200	青 木 真 純 勝 博 亮	聴覚優位で書字運動に困難を示す発達障害児への漢字学習支援	WISC III K-ABC
2008. 11	46(4), 253－263	松 下 浩 之 園 山 繁 樹	自閉性障害児の余暇活動における活動スケジュール利用の効果に関する事例的検討	田中ビネー検査
2008. 11	46(4), 241－251	坂 本 真 紀 武 藤 崇	自閉症児童を対象とした金銭支払いスキル形成のための指導プログラムの開発	コミュニケーション・数的 スキルの記述
2009. 1	46(5), 291－297	赤 塚 正 一 大 石 幸 二	通常の学級に在籍する LD のある児童の小中学校間の引き継ぎに関する実践的研究	WISC III
2009. 1	46(5), 279－290	滝 吉 美知香 田 中 真 理	ある青年期アスペルガー障害者における自己理解の変容：自己理解質問および心理劇的ロールプレイングをととして	FIQ（VIQ）の記述
2009. 3	46(6), 473－488	小 林 倫 代 川 村 秀 忠	障害乳幼児を養育している保護者の状況理解：事例研究を通して（英文）	出生時の成育歴の記述

行うにあたっての空間認知能力について、示唆している。一方、大須賀（2013）は、3歳未満児の描画を通した保育カンファレンスを参与観察し、その記録を考察することを通して、3歳未満児保育の「養護と教育」や「発達の援助」のあり方、「保育の質」の高め方について論考している。栗山（2013）は、感覚運動期における子どもの描画過程での身振り表現に関して、「手の運動やリズムなどを楽しむものと、シンボリックなものに分けられる」と考察している。

英国での特別な教育的ニーズにかかる教育実践の現状や前述の研究成果を俯瞰すると、「気になる子」のアセスメントや支援に関して、描画や制作物の活用可能性が考えられる。そこで、本研究においては、事例を通して、

「気になる子」のアセスメントや支援に際して、描画の活用について検討を加えていくことを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 事例の概要

さくらさん（仮名）は、現在15歳で、低体重出生児である。4か月児健診で、要経過観察となるが、保護者の就労状況から、7か月から保育園で延長保育を含み、生活している。1歳6か月児健診でも、要経過観察となる。3歳児健診の際に、臨床心理士より通常の検診項目に追加して、新版K式発達検査を受診する。小学校低学年時に、図工の教員より「黒い絵を描くことが多いので

心理面が気になる」というコメントが保護者に寄せられた。身辺整理、持ち物の紛失などについて、現在も保護者が気になる面があるという主訴がある。

2. 描画の収集

さくらさん（仮名）の1歳児から現在に至る描画を本人・保護者の同意を得て、分析対象とする。描画については、特別支援教育を専攻する第1著者と臨床発達心理士の資格がある第2著者、神経科学を標榜する研究者1名で検討を加えるものとする。

Ⅲ. 結 果

ここでは、さくらさん（仮名）の描画について、検討を加えていった結果について、述べる。



図1 1歳時の描画

図1は、さくらさん（仮名）の1歳児の描画である。雪だるまの台紙に対して、波形スクリブル、円形のスクリブルなどが観察される。波形スクリブルは、子どもの描画における第1歩と呼ばれており（エング・深田, 1999, pp.13 - 15）、1歳前後で描かれることが多い。

図2は、さくらさん（仮名）の2歳時の描画である。1歳時の描画で観察されたスクリブルとともに、さくらんぼや花のようなスクリブルも観察される。また、ひらがな文字「さ」「ち」などの模写の試みもみられる。物の形状を捉える力もあるのではないかと推察される。

図3もさくらさん（仮名）の2歳時の描画であるが、頭足人らしき描画が観察される。向かって左側が大人の描画、向かって右側が少し小さいため、子どもの描画ではないかと推察される。両方の描画とも目が比較的清くしており、笑顔を表現しているのではないかと推察される。表情が観察されている。但し、手は省略され



図2 2歳時の描画

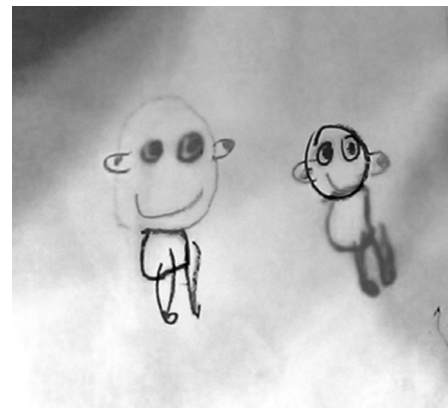


図3 2歳時の描画

ている。エング・深田（1999, p.166）によると、この時期の子どもは、「興味あるもの、重要なものをしばしばとくに大きく描いて強調する」としている。そのため、この描画においては、さくらさん（仮名）は、顔に注目しているのではないかと考えられる。

図4もさくらさん（仮名）の2歳時の描画であるが「あかいのと」「あおいのと」「おとこのおんなのこ」などの文字を描く試みが見られる。これらの内容から青や赤、男子、女子の概念が形成されつつあるのではないかと推察される。また、ハートやさくらんぼなどの模写が見られ、中央には動物らしき描画も見られる。



図4 2歳時の描画

図5は、さくらさん（仮名）の4歳時の描画である。動物園を描いているのか、ぞう、きりん、ペンギン、あひる、くまなどをパーテーションで仕切って描いている。動物園においては、動物は、ケージに入っているという概念が形成されていると推察される。

大きい動物のシンボルともいえるぞう、きりんが上段に描かれており、小動物が下段に描かれているのは、大きさを峻別していると共に、ぞうやきりんが保護者のシンボルであり、小動物がさくらさん（仮名）のシンボルであるとも推察される（浅利, 1998, p.40）。

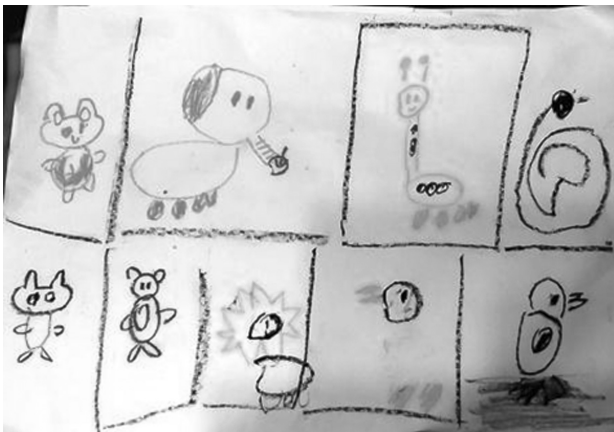


図5 4歳時の描画

図6もさくらさん（仮名）の4歳時の描画である。園庭を描いているのか、女の子が遊んでいるミニプールらしきものが描かれている。図3の2歳時の描画と比較して、女の子の身体も比較的均衡がとれており、手足も左右対称となっている。尚、保護者によると、この時期のさくらさん（仮名）は、すべり台から転落する怪我などが複数回あったとのことで、ミニプールの周辺が比較的太い枠線で囲まれているのは、怪我により身体がききにくい状況表現している可能性もある（浅利, 1998, p.173）。金魚が入っている円形プールが着色して描かれているのは、金魚すくいの楽しかった思い出を

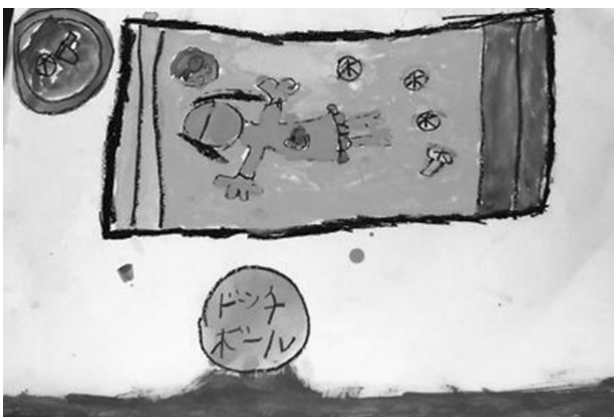


図6 4歳時の描画

表現したのではないだろうか。また「ドッチボール」は、カタカナで書かれているが、園庭の地面に対して、立体的に置かれている様子も出現している。この描画上での褐色の位置によると、「本人が外に出て遊びたい」という意識を表現しているとも推察される（浅利, 1998, p.46）。

図7もさくらさん（仮名）の5歳時の描画である。4歳時から立体的な描画が出現しているが、5歳時の描画は、園で栽培しているじゃがいもの苗を写生しているのではないかと推察される。土の中にじゃがいもが存在する様子も描かれており、石山・田中・池田（2014, p.80）が示すように、空間認知能力も一定あるのではないかと推察される。浅利（1998, p.46）によると「緑には、たかぶりを鎮め、疲れを休め、病を癒し、活力を与える働きがある」という。長時間の保育園での生活に対して、疲れをとりたいという意味合いも内包している可能性がある。



図7 5歳時の描画

図8は、8歳時にさくらさん（仮名）が制作した版画「夜の学校」である。この時期に、保護者は、小学校教員より「黒い絵を描くことが多く、精神面を心配している」といった連絡を受ける。版画を観察すると花の葉脈も緻密に観察して描かれており、黒を用いているのは、心理的な不安や抑圧というよりは、夜に対する関心やさくらさんの世界観を表現しているのではないかと考察した。版画自体は、学校の建物が比較的正しい均衡で構成されている。

図9は、11歳時のさくらさん（仮名）による顕微鏡下のミジンコの観察画である。顕微鏡下の観察画は、片目で観察を行いながら、スケッチを行っていくため、両眼で描画を行うより難しいと考えられる。ミジンコにはさまざまな種類があるが、描かれているミジンコは、不詳である。目の形状、大きさは、観察されている。内臓は、



図8 8歳時の版画



図9 9歳時の顕微鏡観察画

透き通って見えるため、目の下側の乱れたストロークは、内臓を表現したものと推察される。手先が細かい線状になっている点は、観察しきれていない。透明感を描くのは、難しいようで、身体周辺の太い線は、丸いミジンコの形を表現しようとしていると推察する。但し、顕微鏡の角度によっては、身体の全体像が把握できない場合も考えられる。尻尾も描かれている。絵の技巧は、別として、特徴はつかめていると考えられる。

図10は、11歳時のさくらさん（仮名）による顕微鏡下のゾウリムシの観察画である。比較的ゾウリムシの特徴は、捉えられていると考えられる。尚、異なる角度からスケッチを行うと、形がより明確になり、どれぐらい児童・生徒が被観察物の形状を捉えているか把握することにもつながるだろう。

図11は、さくらさん（仮名）の13歳時に描いたスポーツ選手（不詳）の模写である。影なども比較的緻密に描かれ、髪や衣服を見ると立体感も表現できているように感じられる。笑顔のような穏やかな表情の選手を描いていることから、この人物に憧れを抱いているのではないかと推察した。

図12は、冬をモチーフとした15歳時の描画である。同年齢・同テーマでの描画は、白やブルーなどの寒色での風景画や、温かい室内を示す暖色で描かれたものが多

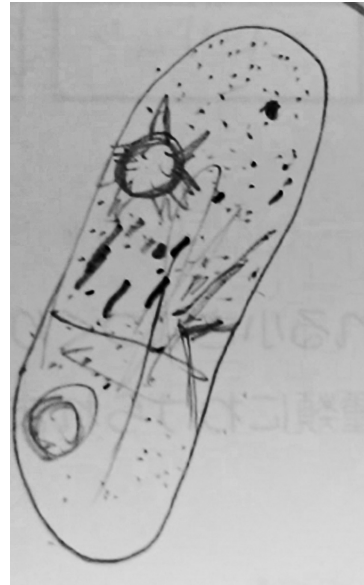


図10 11歳時の顕微鏡観察画



図11 13歳時の描画（模写）

かったが、さくらさん（仮名）での描画は、黒が描画の約半分を占めている。背景の緻密さが、図11と比較すると粗雑な印象を受ける。この時期の描画は、進路や受験に対する不安感を示しているのではないかと考察した。

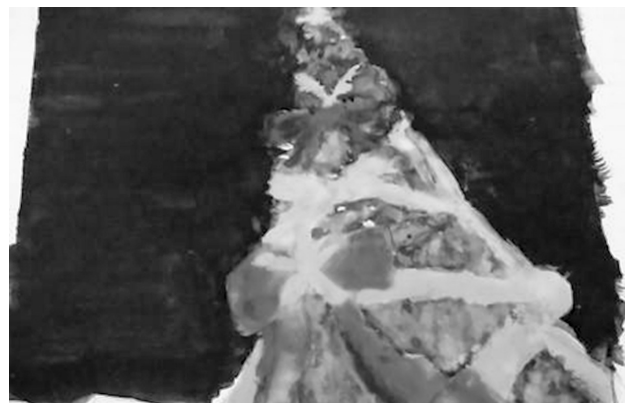


図12 15歳時の描画

IV. 考 察

本研究においては、「気になる子」のアセスメントや支援に際して、描画や制作物の活用について事例を通して、検討を加えていくことを目的とした。

その結果、以下のような内容が考察されうる。

1. 発達が気になる子どもへの描画の活用可能性

本研究で取り扱った事例では、さくらさん(仮名)は、各年齢段階の乳幼児健診において、要経過観察となっている。しかしながら筆者らが描画を検討した結果、スクリブルなど年齢相応の発達をしている可能性が推測される。描画における発達状況をさくらさん(仮名)の保護者が把握しておれば、各年齢段階での乳幼児健診時に受けた不安感が軽減できたのではないかと考えられる。

例えば、図2～図5においては、文字や人物の顔の概念が形成されていることがみてとれる。図6においては、平面的な描画が立体的な描画に変化していることも観察できる。進藤(2015, p.90)は、「描画構成の最初の段階では『視空間情報の分析』が行われ、『表現形式の決定』に至る」と述べているが、立体的な描画を行うためには、空間における事物の位置の把握も必要であろう。

また、描画からは、園や学校での生活感が伝わってくる。園在籍時の描画は、比較的、様々な色が用いられていることより、さくらさん(仮名)が園の生活を主体的に楽しんでいる様子が見てとれる。

エング・深田(1999, p.183)は、「子どもが自発的に描いた、また途切れることなく連続する絵は、あたかも子どもの心の成長の図示そのものである」と述べているが、英国での教育実践において、教室にスクラップブックを常時設置し、描画を集積している理由も一定、理解できよう。

発達検査は、標準化されており、結果の解釈において、共通理解を図ることで可能であるが、切り取られた場面のアセスメントであり、測定者と被検者との信頼関係や同一の発達検査の複数回実施による問題と回答の記憶などによって、結果が変動する可能性も否定できないだろう。そのため、児童の心の変化を把握するために、描画を介した子ども理解についても検討してもいいのではないだろうか。発達が気になる子どもが家族にいる保護者にとっては、子どもの描画を集積していくことで、子どもの発達の状況がある程度把握でき、早期の気づきや不安の解消の双方に活用できることが考えられる。学校の教員にとっても、特に、「気になる子ども」に対して、普段、教室で提出、回収、掲示等を行っている描画や制作物で、児童・生徒の状況を把握することにつながると考えられる。

2. 子どもが抱える不安や生きづらさの気づきへの描画活用性

さくらさん(仮名)の描画のなかには、図8や図11に見られるように、黒が多くを占めているものがある。当時、保護者が小学校教員よりさくらさん(仮名)を心配しているという連絡を受けたことから、描画を通してさくらさん(仮名)の精神面の何らかの異変を察知したことがわかる。このような子どもの描画に表れる気になる事柄から、保護者等と子どもの不安要素を共有することによって、その原因が家族関係から起こったことであるのか、または友人関係、学習面における困難からであるのか等、問題の根源を探り、解決に向けた方法を勘案することにつなぐことのできる役目があるのではないだろうか。小学校時、中学校時から現在に至るまでは、小学校低学年時に、図工の教員から指摘を受けたように、心理的な不安がある時期も存在していた可能性がある。特に、図11の緻密さと図12の粗雑さが対照的である。

加藤・日下(1995)は、描画にはコミュニケーションの機能があると述べている。子どもが描いた絵に子どもが解説を加えるのを見たり聞いたりすることにより、「子どもと単に会話を交わすだけではほとんどわからない、連想や意味や感情の生まれる場としての子どもの心に接近することができる」としている。したがって、子どもの心を理解する上で、描画の持つ可能性が期待できることがわかる。

子どもの不安に気づくためには、子どもに接する時間が多い教員等が、日頃から意識して、子どもの描画等に目を向けることが求められると考える。描画をきっかけとして、他のさまざまな情報を集積し、総合的に子どもの状況を捉えることが望ましいと考える。可能性として、図画工作や美術の教員である場合は、一定の作品や制作物の解釈の視点を持ち合わせているかもしれないが、その他の教科の教員は、作品や制作物の完成度や技巧に視点がおかれ、どうしても「上手」「下手」といった形で評価しがちである。今後の課題としては、子どもの描画や制作物に視点を置く上で、作品の上手さを見るのではなく、子どもの状況をより正確に捉えるために、実際の現場で活用しやすい描画の分析の観点や解析の指標のあり方についての研究や実践を進めていく必要があると考える。加藤・鈴木(2015)によると、描画法の技法ごとに特有の観点や解釈仮説が存在する一方で、技法を超えて普遍的に活用が可能な視点も多く存在することが改めて確認されている。したがって、より詳細に子どもを理解するためには、教員がそれらの診断方法や解釈の方法を学び、応用することも必要であると考えられる。ケログ・深田(2003, p.183)は、「ゲゼルは3歳時に幾何学形態—四角形・円・三角形・十字形・ひし形—の模写をさせた

が結果はきわめて粗末であった。しかしこの年齢の児童なら、ひし形以外の幾何的図形を自発的に美しく描くことができる。明らかに模写に含まれる知的活動は、自発的描画に必要なそれとは別種なのである」と述べている。つまり、臨床心理領域における絵画テスト法をさらに、学校教員が学校現場で活用できるようなシンプルな描画における知見についても求められるだろう。扇田 (2003, pp.20 - 25) は、「絵は言語の表徴である」「絵は概念形成や生活経験の反映である」「絵は子ども自身のイメージのあらわれである」「絵は創造的な思考と、欲求の表れである」「絵は環境に対する態度をあらわしている」と述べているが、テストとして実施する描画以外の児童生徒の主体性で描かれた描画に着目した分析法などである。

本研究での描画は、同一の子どもによる15年間の描画の集積物であり、学校園での教育活動内で描かれた自由画、模写、観察画が含まれている。描画発達状況の一つの事例として、ご参照いただき、ご示唆を頂けると幸いである。今後この分野の研究が進み、教育現場に応用可能な描画の分析の視点が浸透することにより、子どもの描画や制作物の分析が、子どもにとって安心・安全に過ごせる新たな環境を作っていくことに、大きな役目を果たすようになればと考える。

付記

本研究は、第一著者の見立知穂が鳴門教育大学大学院に提出した修士論文の事例の一部に、新たなデータを追加し、第二著者と共に、再分析、再構成、考察を施したものである。

謝辞

ご協力をいただきましたさくらさん（仮名）及びご家族、顕微鏡下の観察画及びミジンコの生態メカニズムについて、ご示唆いただきました本学基礎・臨床系教育部の田中淳一教授にお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 青木真純・勝二博亮 (2008) 「聴覚優位で書字運動に困難を示す発達障害児への漢字学習支援」『特殊教育学研究』46巻3号, pp.193 - 200
- 浅利篤監修・日本児童画研究会編著 (1998) 『原色 子どもの絵診断辞典』黎明書房
- 赤塚正一・大石幸二 (2008) 「通常の学級に在籍するLDのある児童の小中学校間の引き継ぎに関する実践的研究」『特殊教育学研究』46巻5号, pp.291 - 297
- 天岩静子 (2014) 「知的障害児におけるパソコン描画ソフトを利用した絵画イメージの変化」共栄大学研究論集 12巻, pp.251 - 271

- 網谷優子・武蔵博文 (2008) 「発達障害児の集団における社会的コミュニケーション環境についての検討:『発表者』『聞き手』の役割学習の効果」『特殊教育学研究』45巻5号, pp.265 - 273
- 石山徹・田中彰夫・池田るり子 (2014) 「描画学習における機能的な展開可能性に関する研究」『美術教育学』（美術科教育学会誌）第35号, pp.79 - 91
- 扇田博元 (2003) 『描画心理学双書⑤絵による児童診断ハンドブック 2刷』黎明書房
- 大須賀隆子 (2013) 「3歳未満児の描画を通じた保育カンファレンス (I) - 『五感を通じた経験を吸収した身体運動の軌跡』をめぐって -」人間文化創成科学論叢第16巻, pp.117 - 125
- 大城理恵・神園幸郎 (2008) 「高機能自閉症児における社会性の発達と描画の変化」『琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要』9号, pp.81 - 92
- 大久保賢一・福永 顕・井上雅彦 (2007) 「通常学級に在籍する発達障害児の他害的行動に対する行動支援: 対象児に対する個別的支援と校内支援体制の構築に関する検討」『特殊教育学研究』45巻1号, pp.35 - 48
- 岡村章司・藤田継道・井澤信三 (2007) 「自閉症者が示す激しい攻撃行動に対する低減方略の検討: 兆候行動の分析に基づく予防的支援」『特殊教育学研究』45巻3号, pp.149 - 159
- 加藤大樹・鈴木美樹江 (2015) 「教育現場における描画テストの活用に関する研究の動向」『金城学院大学論集人文科学編』第11巻, 第2号, pp.32 - 39
- 加藤義信・日下正一 (1995) 『子どもの絵の心理学』名古屋大学出版会, pp.5 - 6
- 栗山誠 (2013) 「子どもの描画過程における身振りと言式の関連」大阪総合保育大学紀要8号, pp.1 - 11
- 後藤隆章・雲井未歆・小池敏英・太田昌孝 (2008) 「LD児における日本語かな文字読みの特異的読字障害」(英文)『特殊教育学研究』45巻6号, pp.423 - 436
- 小林倫代・川村秀忠 (2009) 「障害乳幼児を養育している保護者の状況理解: 事例研究を通して」(英文)『特殊教育学研究』46巻6号, pp.473 - 48
- 坂尻千恵・前川久男 (2007) 「注意欠陥多動性障害児および広汎性発達障害児を対象とした Stop - signal 課題における反応抑制の検討」『特殊教育学研究』45巻2号, pp.67 - 76
- 佐々木かすみ・竹内康二・野呂文行 (2008) 「自閉性障害児におけるピアノ演奏指導プログラムの検討」『特殊教育学研究』46巻1号, pp.49 - 59
- 坂本真紀・武藤崇 (2008) 「自閉症児童を対象とした金銭支払いスキル形成のための指導プログラムの開発」『特殊教育学研究』46巻4号, pp.241 - 251
- 渋谷郁子 (2008) 「幼児における協調運動の遂行度と保

- 育者からみた行動的問題との関連」『特殊教育学研究』46巻1号, pp.1-9
- 進藤将敏 (2015) 「幼児における描画構成の発達：非標準型の構成と認知的要因との因果性」 認知心理学研究 第12巻第2号, pp.89-99
- 菅原亜紀 (2016) 「A 市内保育所における『気になる子』に関するアンケート調査結果より見えてきたもの」『純真紀要』56号, pp.85-96
- 高橋甲介・野呂文行 (2008) 「路上で危険な行動を示す自閉症男児への安全な歩行スキルの指導」(英文)『特殊教育学研究』45巻6号, pp.489-500
- 高橋眞琴 (2016) 『一複数の障害種に対応するーインクルーシブ教育時代の教員の専門性』ジアース教育新社
- 滝吉美知香・田中真理 (2009) 「ある青年期アスペルガー障害者における自己理解の変容：自己理解質問および心理劇的ロールプレイングをとおして」『特殊教育学研究』46巻5号, pp.279-290
- 徳島県立総合教育センター「チェックシート(改訂徳島版)利用マニュアル」<http://www.tokushima-ec.ed.jp/> 特別支援／特別支援教育に関する資料(ダウンロード)／で閲覧可能(閲覧日：2017. 2. 1)
- 中央教育審議会 (2011) 「資料1-2：特別支援教育の在り方に関する特別委員会(第12回及び第13回)における教職員の確保及び専門性の向上に関する主な意見」
- 野田みさき・吉岡恒生 (2015) 「自閉症者とのプレイセラピーー描画を通じた世界観の共有ー」愛知教育大学教育臨床総合センター紀要第6号, pp.63-70
- 樋口和彦 (2008) 「読み障害児のひらがな単語の読みにおける文脈の活用について」『特殊教育学研究』46巻2号, pp.69-79
- 廣澤満之・田中真理 (2008) 「非慣用的言語行動を多用する自閉性障害児に対するかかわり手の発語の分析：かかわり手による非慣用的言語行動の理解変容過程との関係」『特殊教育学研究』45巻5号, pp.243-254
- 廣澤満之・田中真理 (2008) 「広汎性発達障害児における非慣用的言語行動の発達過程：非慣用的言語行動の機能に着目して」(英文)『特殊教育学研究』45巻6号, pp.513-526
- 原田琢也・高橋眞琴・濱元信彦・中村好孝 (2016) 「ロンドン・ニューアム区の学校のインクルーシブ教育実践」金城学院大学論集社会科学編 13巻1号, pp.1-20
- ヘルガ・エング著 深田尚彦訳 (1999) 『子どもの描画心理学ー初めての線描き(ストローク)から8歳時の色彩画までー』黎明書房
- 堀篤実 (2015) 「気になる子どもたちへの早期発達の援助の試み」東邦学誌 44巻1号, pp.165-177
- 松下浩之・園山繁樹 (2008) 「自閉性障害児の余暇活動における活動スケジュール利用の効果に関する事例的検討」『特殊教育学研究』46巻2号, pp.253-263
- 三井菜摘・熊谷恵子 (2007) 「自閉症児に対するエコロジカルなアセスメントを用いたコミュニケーション指導」『特殊教育学研究』45巻4号, pp.217-227
- 文部科学省 (2012) 「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」
- 室谷直子・前川久男 (2008) 「PASS 読み促進プログラム(PREP)を用いた読み困難児の読み支援」(英文)『特殊教育学研究』45巻6号, pp.473-488
- ローダ・ケロッグ著・深田尚彦訳 (2003) 『描画心理学叢書③児童画の発達過程(第2刷)』黎明書房